岡山県立短期大学紀要　37巻　19～26頁（1992）

「童謡の研究㈢」

――北原白秋の童謡観――

柴田奈美

はじめに

前稿では、大正八年一月号から大正十一年十二月号までの「赤い鳥」を中心資料として、子供の作品の呼称を「童謡」から「自由詩」という用語に変化させるに至った、白秋の童謡観について考察した。

本稿では、大正十三年三月号より、大人の投稿童謡の巻末入選欄のサブタイトル名が、「創作童謡と詩」あるいは「詩と童謡」といったものに変化していることに注目し、その前後の批評欄を詳しく考察することにより、白秋の童謡観を明らかにしたい。大正十二年一月号から大正十三年十二月号までの「赤い鳥」を中心資料とする。

短い期間であるので、「大人の作品についての批評」、「子どもの作品についての批評」の二つに分けて、考察を進めたい。

①　大人の作品についての批評

大正十一年では、大人の作品にもよいものが表れてきた、と評価した白秋であったが、大正十二年になると、次のように再び厳しい批評がなされている。

「大人たちの童謡は非常に悪かつた」「大人たちのはどうも不純になつていけません。もつと真純になれないものかしら。『赤い鳥』の童謡も子供たちの自由詩に、蹴落とされてしまつて以前の俤が無くなつた」（大正十二年一月号）。

「大人たちの童謡はまだ充分とゆきません。もつと本質的ないいものを欲しいと思ひます　さうしてもつと深みのあるものを」（同年二月号）。

「子供たちの方が優勢になつてすつかり大人の組が蹴落とされたのは残念です」（同年三月号）。

しかし、大正十二年六月号には、

「村上君の『湊』を推奨します。久しぶりに大人の創作童謡が特選に入つたのは愉快です」（同年六月号）。

と述べ、また同年七月号には、

「大人たちの童謡も一二の将来のある人が目につき出したのは悦ばしい事です」

と評価している。

この時期に注目すべきことは、次のように童謡以外の「自由詩」が大人の作品にも見られ、それを白秋が推奨していることである。

「今度の中で望月君の『山の家』は詩ですが、児童たちに読ませるかうした自由詩も児童以外に必要だと思ひます。私も作つてゐますが一つ皆さんも試作して見て下さい」（大正十二年四月号）。

「在来の童謡以外一方に読物としての『少年詩』といふべきものが、これから生まれつゝあることも見のがしてはなりません。私もすでにさうしたものに着手しましたが、この形式も歌謡以外に必要です」「この方面も進められるだけ進めたく思ひます」（同年七月号）。

またこの点については、白秋は論文「童謡本論（童謡私観）」の中で、次のように述べている。

「かうした歌ふべき童謡以外に、静かに読ませ、または黙して味はすべき詩――童詩――も児童に与ふべきであらう」「私は童謡以外に、新風の童詩（主として自由律）方面にも、今後は愈々開拓の犂を動かさねばならない」（「詩と音楽」大正十二年一月号）。

このように、ちょうど白秋自身の童謡観に、変化の起こりつつある時期であったことがわかる。

ここで、参考のために、この時期に「自由詩」「少年詩」として白秋に評価された大人の作品を、一例挙げておきたい。

卒業式

和歌山　安井純星

卒業式に、
空は青かつた。
たんぽゝが岸にさいてゐた。
町では大工が、いろんな響をたてゝゐた。
悲しい響、
淋しい響、
恐い響、
あゝ私は卒業する。
そして紺のはんてんを着て、
大工になるのだ。

このような作品に対し、白秋は「新しい試作として注目に値すべきだと思ひます」（大正十二年七月号）と選評している。子どもたちが自然に口ずさめる童謡とは別の、子どもたちの読む「詩」の開拓を考え始めたのが、この時期である。

その後、大人の作品に「詩」が増えていくが、その選評には次に見られるとおり、厳しい注文がつけられている。

「純然たる歌謡本位のものの外に、少年の読物としての詩が他方にも必要であることは申しましたが、それにはもつと智的なものがほしいのです。単に児童自身の自由詩のそれとは幾分趣を異にしなければなりますまい」（大正十二年八月号）。

「自由詩も歓迎しますが、これも芸術のにほひの高い、そして純真なものであつてほしいのです。児童たちの自由詩とは少なくとも違つた、もつと思想に於いても深いので無ければなりません」（大正十三年一月号）。

このような白秋の激励に対し、大人の作品の「詩」「童詩」が「童謡」よりもかなり増えていっていることが、次のような選評文からわかる。

「大人たちの作品には、童謡といふより少年物としての詩が多くなりました」「詩の方では安井君、松本君あたりが有望です。それからこの欄で第一に重大とする童謡が、いよいよ数が減つて来ますが、これはどうにかしなくてはなりません」（大正十三年三月号）。

そして、この大正十三年三月号から、大人の投稿童謡の巻末入選欄には、「創作童謡と詩」（号によっては「詩と童謡」「童詩と童謡」）というサブタイトルを掲載するに至っている。翌月の四月号の選評文には、「大人たちのも童謡と自由詩とは別けることにしま□（冫字）た」と述べている。

つづいて、大正十三年五月号では、

「大人たちのは童謡はやはりいゝのがありません、詩の方がだん〳〵よくなるやうです」「童謡の方はもつとどうにかならないものか、もう少し奮発してもらひたくおもひます」

と詩の方を評価している。

さらに、

「西條君の『この野道』は少年の詩らしくていい。素直な無邪なものだ。表現ものびのびとして自由でいい。井本君の『牛』も素朴な田舎の少年の生活が目に見えるやうでいい。純な感情とそのままの表現で、何の飾り気もなく歌つてゐる。創作童謡以外に成人のつくる童詩は以上の二篇のやうにありたい。やはり少しは長くて、少年への愛が充分にあつて、さうして童心が満ちてゐなければならぬ」「子供たちの読物としての詩は相当に童詩としての内容のあるものでなければならないといふことになる」（大正十三年十一月号）

と述べ、童詩の一つの典型というものを、投稿作品の中に見出して、評価している。

以上の概観から、大人の作品の場合も、子どもの場合と同じように、童謡から分化して自然発生的に、自由詩が生まれてきたことがわかる。白秋は、子ど

もの自由詩を認めたように、大人の自由詩もその必要性を認めたが、そのあり方は、子どもの場合とは違っていたことが指摘できる。子どもの場合は、童謡よりも自然なリズムによって作り出される自由詩を歓迎したのに対し、大人の場合は、あくまでも子どもの謡える童謡を主とし、その一方で自由詩の分野の開拓の必要性も認めるという態度であった。

詩の創作の隆盛を評価するとともに、童謡の創作を強く促した点に注目したい。

このような白秋の方針のもとに、大人の童謡の方もレベルが上がっていったことが、次の選評文からわかる。

「今度は大人たちの創作が近来に無い成績でうれしい」「先ず山本君の『イボタのお家』は詩として如何にも純情で清新です」「平野君の『枯葦小島』は童謡としてよく落ちついてゐる。雅致がある」「『夜』は童謡として良かった」（大正十三年七月号）。

「大人たちの中では北島、松本、山本君あたりの詩がすぐれてゐます。川田為三君の童謡もいゝものです」（同年八月号）。

「大人のものとしては土井君の『はますげ』一篇を推奨にします。韻律の上でいいものがあります」「大人たちのもだんだんよくなつて来てうれしいと思ひます」（同年十月号）。

次は、全体的な大人の作品の選評についてである。「童心」「深い愛情」の必要性については以前と同じように説いてるが、この時期に注目したいのは、次に引用するとおり、子どもの作品との本質的な違いを強調している点である。

「もつと智的なものがほしいのです。単に児童自身の自由詩のそれとは幾分趣を異にしなければなりますまい」（大正十二年八月号）。

「幼年には幼年としての、少年には少年としての、大人は大人としての詩を創ることが大切です」（同年九月号）。

「児童たちの自由詩とは少なくとも違つた、もつと思想に於いても深いので無ければなりません」（大正十三年一月号）。

「ただ児童がこの自由詩を作るのとは可なりちがふし、深い愛を持ち、また一方に大人としての詩も相当に作れなければ少年の読物としてのいい詩も出来るわけはないのです」（同年九月号）。

また、そうした違いに伴い、作品の長さについても、子どもに短いものを求めたのとは違い、ある程度長いものを要求している。

「大人たちのは少しは長くてもいゝのです」（大正十三年一月号）。

「やはり少しは長くて、少年への愛が充分にあつて、さうして童心が満ちてゐなければならぬ」（同年十一月号）。

ここで、大正十三年十一月号の選評文の中で、童詩の一典型として推奨された大人の作品「この野道」と、同じ号の子どもの推奨作品「露の路」を例として掲げ、その長さを比較しておきたい。

この野道

宮城県桃生郡
寺崎八一番地　西條次郎

この野道だよ。
兄さんを渡し場に
むかひに行つたよ。
中学の夏服をきた兄さんは、
道ばたの麦の穂ぬき〳〵
町の話をしたつけ。

この野道だよ。
ひぐらしの雨のなかを
兄さんを送つたよ。
舟が岸をはなれる時、
雑誌を送るよと
淋しく笑つたつけ。

あゝ、ひぐらしが、ひぐらしが
今年も鳴いてゐる。
だが兄さんは
遠い都に行つたよ。
そして僕は来年
町の中学に入るんだ。
この野道だよ
夕やけに赤いよ。

露の路

神奈川県津久井郡
協心小学校尋六年　小山守男

露の路を通つたら、
もろこしの匂ひがした。
ほゝ白が小さくぜつた。

② 子どもの作品についての批評

大正八年より子どもの作品を大きく評価し始め、その後ますますその傾向が強まっていった。

大正十二年、同十三年のこの時期は、いよいよその評価が高くなり、次のような白秋の選評が見られる。

「『赤い鳥』の自由詩はよくこれまでに進んで来ました」（大正十二年一月号）。

「いよいよ粒ぞろひに光つて来ました。いよいよ子供たちの新興が驚くべき高い所まで上つて来つつあります」（同年七月号）。

「今度も尋常科は非常の出来でした」（大正十三年二月号）。

「この五人の子供たちの進境のいちじるしさには驚きます」「自画自賛のやうですが、私は自信を持つて、この子供たちの詩を高く掲示し得ることを私の歓びとします」（同年十二月号）。

それでは、前稿で指摘した、白秋の主張の次の三点については、どのように述べているのであろうか。

(1) 「童謡」から「自由詩」へ
(2) 自然なリズムの主張
(3) 短さの主張

まず、大正十二年一月号には、

「子供たちにただ調子本位の童謡を作ることのみすすめて、リズム本位の自由詩を奨励することを知らない人はほんたうに詩といふものが分かつてゐる筈はありません。これが一番だいじなことです。子供には子供の詩があるといふことを知らない人は禍です」

と述べており、引き続き子どもの自然なリズムから生み出される自由詩を、奨励していることがわかる。

また、短さについても、

「佐々木さんの『広い野原』も短いがよくちよぼちよぼの赤くさが出てゐます。これも新しい俳句と同じものでいいものです」（大正十二年一月号）。

「松波君の『ひろ野』は新しい俳句そのままの内容形式で、簡潔で、中々しずかなさびしい自然のいのちをとらへてゐます」「富岡君の『こほろぎ』は新しい短歌のやうで、それより短い。よけいな言葉がない」（同年九月号）。

と、以前と同じく、短歌、俳句と比較することによって、子供の自由詩の簡潔さを評価している。

ここで、参考のために、「ひろ野」「こほろぎ」を次に挙げておく。

ひろ野

岐阜県稲葉郡本
荘小学校一年　松波由一

からす草の
実をならす、
ひろ野。

こほろぎ

東京市外淀橋町柏
木一一九（十五歳）　富岡隆

叢の中でこほろぎがないている、
耳遠き母上の顔のさびしさ。

このように、大正十一年までの白秋の主張は、そのままこの時期にも変ることなく、選評文の中で述べられていたことがわかる。

この時期の選評の中に見られる白秋の主張として、特に注目したいのは、次のように抒情性を強調している点である。

「自然観照のこまかで正しくしつかりしてゐる点ではいつも大宝が第一ですが、この外に児童の生活感情を率直に歌つた、抒情詩方面の開拓を忘れられてはなりまん。写実一方に偏してもなりません」「いかにも子供らしい感情が出てゐて微笑させます。かうした方面の詩は是非子供に作らせるべきです」「ああした気もちは子供通有のもので、私たちにもよくあつた事です。で、かうしたものは一時的のものでなく、不易的のものだといふ事も考へてほしいと思ひます」（大正12年四月号）。

さらに、翌月の第五号では、この抒情性について、かなりのスペースを割いて、次のように述べている。

「現在『赤い鳥』のも少しづつ型ができかけてゐます。それは、あまりに繊細な写生に傾き過ぎたかの感があります。絵画的ではあるが幾分音楽的で無くなり、一体に自然観照が主で子供としての抒情味が欠乏し、簡潔ではあるがあまりに硬く窮屈に凝つてしまつて、自然の感情の流露といふものが停りかけた、これは非常に注意していただきたく思ひます」「観照から言つても大人の歌人たちや俳人たちのものとすこしもかはらない、しつかりしたものになつて来、高くもなつて来ましたが、それとともに大人びて、子供らしさが少しづつ失はれて来つつあるのでないかとおもひます」「今少しく児童の感情生活の表現に立ち還らせる必要があります。さうして抒情方面も相当に開拓しないと一度は行きつまる事とおもひます」「新井君の『雪ふれ』も屋根の雪を鷺足に乗つてぱくぱく食つてやるといふところは、全く子供の生活感情です。ここがいいのです。詩としての高さから言へば」「まだ幾つもこれより傑れたのがあります。然し今度はわざとこの無邪気な一篇を推奨します。考へてほしいからです」。

この時点から、選の観点に変化の見られることが指摘できる。そして、その後、抒情性を評価した選評が多く見られるようになる。

「『上の山』は如何なる児童にも普通的な回想です。それをよくとらへてゐます」「わたしたちもよく子供の頃にさうしたことがあつたものです。かうした子供としての生活そのものから歌ひあげたものはほんとうに子供のよい抒情詩です。内田君の『夕方の道』は何といふ情味の深いものかと思ひます」（大正十二年六月号）。

「あの『山』の『あたまを結はうと思つた』なぞは、おなじく、自分の心の動きの一つを注意深ぶかくとらへたところに妙味があります。いくつかの私の注意をよくききわけて、写生だけでなく、かうした抒情味をとり入れて下すつた事はうれしいと思ひます」「酒井君の『教科書』はいかにも無味乾燥な今の教科書に対する反感を無邪気に現しておもしろい」「私たちの子供の時にもいつもさう感じてゐたことだからうなづけます」（同年八月号）。

「かうした自分のふだんの感情生活から詩がうまれることはうれしいことです」（大正十三年一月号）。

「長山君の『桃売り』は少年の生活感情がよく出てゐて微笑させます」（大正十三年二月号）。

「平井君の『忘れ物をして』は私たちの小学生時代のことがよく思ひ出されます」「かうしたこまかな感情の動きをいつも注意してとらへることが大切です」（同年四月号）。

「南さんの『思ひ出』を読むとまた子供の感情生活の一片が目に見えるやうに現はれて来ます」（大正十三年七月号）。

「実に子供たちの感情が出てゐます。かうしたものもぜひ作つて下さらねばなりません」（同年八月号）。

「幼い時のかうした幻想を誰しも山の向うに持つてゐるものです」「ただ自然を観るばかりでなく、かうした自分の生活の中から、自分の感情の動きをとらへて来るのもほんとうにいいことです」「ほんたうに自分も小さい時はさうだつたと思ひます。皆さんもかうした詩をどし〳〵作つてほしいのです」（同年九月号）。

以上の引用から、写生を中心とした自然観照の方面のみに進んできた子どもたちの自由詩に行き詰まりを感じ、子どもたちの生活の中から自然に湧き出る感情を中心とした自由詩も、一方において大切であると強調していたことがわかる。これに対し、子どもたちは選評文に見られるとおり、白秋の希望どおりに、みずみずしい生活感情を詠った自由詩を創り、投稿している。

そして、写生、抒情の両面において、「赤い鳥」の自由詩は、その詩境を深めていくことになった。その成果が、早くも大正十三年には十分に表れ、十二月号には次のような白秋の感想が見られる。

「私はこれらの中のすぐれた詩は、今の詩壇の中へ介在さしても、決して遜色を見ないものだとさへ思ひます。『赤い鳥』の小詩人たちもここまで進んで来てくれたかと思ふと、私はどれだけでも威張れるやうな気がします」。

ところで、子どもの生活感情を詠った作品を批評するときに、しばしば見られるのが、次のような感想である。

「ああした気もちは子供通有のもので、私たちにもよくあつた事です。で、かうしたものは一時期のものでなく、不易的のものだといふ事も考へてほしいと思ひます」

という、大正十二年四月号の選評文に始まり、

「如何なる児童にも普遍的な回想です」「わたしたちもよく子供の頃にさうしたことがあつたものです」（同年六月号）。

「私たちの子供の時にもいつもさう感じてゐたことだからうなづけます」（同年八月号）。

「私たちの小学生時代のことがよく思ひ出されます」（大正十三年四月号）。

「幼い時にかうした幻想を誰しも山の向うに持つてゐるものです」「ほんたうに自分も小さい時はさうだつたと思ひます」（同年九月号）。

と、しばしば子どもの生活感情の普遍性を強調している。

子どもの頃に誰もが感じる気持ち、抱く幻想等、ちょっとした心の動きを見逃さないで、言葉を使って定着させ、詩とすることを、白秋はこの時期に強調しているのである。

次に、子どもの自由詩の境地について述べている点に注目したい。

前稿では、大正十年の時点で、子どもの自由詩が短詩型文学の俳句や和歌の本質的なもの、ものの見方、境地などと変わらぬものを内包しているとし、白秋自身の俳句や短歌と子どもの自由詩とを比べて、境地は少しもかはらない、という結論に至っていることを明らかにした。

この考え方は、大正十二年、同十三年でも変らず、次のように述べている。

「有本さんの『竹の葉』も寂しさが出てます。首をすつこめるひようきんなところも笑はせます。笑はせるけれどそれはしみじみしたものです。俳諧風のものです」（大正十二年二月号）。

「ここまでくれば大人のすぐれた歌人たちの境地まだ踏み込んでゐます」（同年四月号）。

「観照から言つても全く大人の歌人たちや俳人たちのものとすこしもかはらない、しつかりしたものになつて来、高くもなつて来ました」（同年

五月号）。

「鈴木君の『すずめ』は『木の枝をこぼるゝ雀』とうたつてゐますが、私の以前の作にも『百姓眼をあげ枯木に雀がこぼるるぞ』といふのがあります。見方は一つです」（同年七月号）。

「大人の歌人たちは、よくかうしたところをとらへてゐます。これで見ると子供たちの観照もおんなじだといふことが分かります」（大正十三年三月号）。

「芭蕉の句のやうな味があつて、かなりの大人の作家のまだ行けないところを、やすやすと言つてゐるやうに思はれます」「いゝ俳句にでも接するやうな味はひがあります。淡々としてゐて、それで香ひも響きもあります」（同年十二月号）。

しかし、この時期になると、子どもの作品と大人の詩人等の作品の同質性を強調すると共に、次のように、大人の作品の子どもの作品との違いを強調していることに気づく。

「勝田さんの『死んだ海がに』のさざなみに動かされながら死んでゐるとはよく観ました。この境地を観るだけでなく、深く知ることの出来る人はよほどすぐれた詩人でなければなりません。で、すぐれた詩人といふものは、こゝまで還つて来る人です。子どもたちと観るところは同じですが、感覚以上の深い心から観ます。子供たちは観るところは観るがまだ知りません。たゞ直面は為得るのです。こゝが面白いのです。この場合これは悠久な大自然界そのものゝ象であり、老荘の無為であり、佛の寂滅であります」（大正十三年二月号）。

「これだけの観方をした詩は大人たちのにもありません。私の詩風によくかうしたのがありますが、それは苦しんで、こゝまで還つて来たので、子供は何でもなくなやつてしまひます。こゝが考へなければならないところで、私たち大人の詩はかうした子供の詩とおなじところまで還つて、而もそれが境涯的にならなければならないのです」（同年十二月号）。

これらをまとめると、子どもと大人では観るところは同じだが、子どもの場合は直観的に把握するにすぎない。大人の場合は感覚以上の深い心で観、深い思想に支えられたものでなければならない。「観る」だけではなく、「知」らなければならないのである、という主張である。

子どもと大人の詩の根本的な質の違いを述べているわけで、このような自由詩観を抱くに至って、大人の作品について述べるときにも触れていたが、「成長段階に合った詩の創作」ということを、次のように述べている。

「年齢とその詩といふ事についても可なり考へさせられます」（大正十二年三月号）。

「幼年には幼年としての、少年には少年としての、大人は大人としての詩を作ることが大切です」（前出　同年九月号）。

「この人たち（高等科以上の人）はもう少年としての詩、もつと高くなつた水準を抜けていいとおもひます。十五六歳は十五六歳としての詩を作らねばなりません」（大正一三年一月号）。

「井本君あたりはもう年齢から云つてもこの欄では卒業にしていいのです。これから大人の方に入つて少し長いものを作つてごらんなさい」（同年十月号）。

おわりに

以上、大正十二年一月号より同十三年十二月号までの、白秋の童謡観の概要をまとめると、次のようになる。

まず、大人の作品については、次の四点にまとめられる。

第一に、童謡以外の「自由詩」が大人の作品の中にも見られ、それを白秋が認めたことである。子どもたちが自然に口ずさめる童謡とは別の、子どもたちの読む詩の開拓を志し始めたのが、この時期である。その結果、形式的には、大人の投稿童謡の巻末入選欄のサブタイトルが、「創作童謡」から「創作童謡と詩」、あるいは「詩と童謡」、「童詩と童謡」といったものに変化していった。

第二に、大人に自由詩を求める白秋の態度は、児童に対するものとは違い、あくまでも童謡を主とし、その一方で自由詩の開拓の必要性も認めるといったものであたこと。

第三に、童謡・自由詩ともに、次第に作品のレベルがあがってきたと評価していること。

第四に、大人の自由詩と児童の自由詩との本質的な違いを強調し、その違いに伴い、作品の長さについても、児童の作品とは違い、長いものを要求していたこと。

次に、子どもの作品については、三点にまとめられる。

第一に、子どもの作品の評価が、いよいよ高くなってきたことである。

第二に、今までの三点の主張、即ち「童謡から自由詩へ」、「自然なリズムの主張」、「短さの主張」については以前と同様であり、さらに、この時期の特色は、抒情性を強調していることである。写生、抒情の両面において、「赤い鳥」の自由詩は、その詩境を深めていくこととなった。

第三に、大人と子どもでは観るところは同じだが、子どもの場合は直観的に把握しているにすぎないとし、大人と子どもではその詩境の深さが違うので、成長段階に合った詩の創作をすることが大切であるとしたことである。

大正十二年、同十三年という時期は、大人の作品については自由詩の開拓を、また子ども作品については抒情詩の開拓を進め、「赤い鳥」の自由詩の世界の幅を広げてきた時期であった。また一方では、大人と子どもの両方の作品選評を通して、各々境地の根本的な違いについて言及し、童謡観に深まりの見られる時期であったと考える。

引用文献

「赤い鳥」復刻版　近代文学館
『白秋全集』　岩波書店　昭和五十九年

参考文献

桑原三郎『赤い鳥の時代』　慶応通信　昭和五十年十月二十日
日本児童文学学会編『赤い鳥研究』　小峰書店　昭和四十年四月十五日
根本正義『鈴木三重吉と「赤い鳥」』　鳩の森書房　昭和四十八年一月
佐藤通雅『北原白秋――大正期童謡とその展開』　大日本図書株式会社　昭和六十二年十二月二十日

平成四年五月一日受付
平成四年五月七日受理